

周防灘30カイリ・潮の路県際間交流事業ワークショップ祝島会場議事録

- 1 開催日時 平成14年10月7日(月)18:00~20:00
- 2 開催場所 民宿くにひろ
- 3 出席者(大分県側) 三浦、丸山、是松、深田、長峯 5名
- 4 出席者(徳山市側) 木村、國弘、工藤 3名
- 5 議事項目
 - 1) あいさつ及び事業説明(大分県産業創造機構)
 - 2) 自己紹介(住所・氏名・所属グループ程度)
 - 3) 両地域を結ぶ交通事情とデータの比較(大分県産業創造機構)
 - 4) 参加者それぞれの地元での活動内容等について(各参加者)
 - 5) 互いの地域に対する理解や認識、関わり等について(各参加者)
 - 6) 相互交流に対するアイデア・意見等について(各参加者)

6 議事記録

(ワークショップ前の談義)

是松 ここは1周ずっと回れるんですか？

國弘 道は半周しかしてないです。後は海岸を歩いて回って、途中ちょっと泳いで。このへんはもう泳がないと海岸が無いんですよ、崖しかないんで。どうしてもここを泳がないと渡れないですね。他は潮が引いてれば歩けます、かなり。ただ途中で歩いてるうちに潮が満ちてくると、やっぱり泳がなきゃといけないはめにはなるんですけど。

三浦 じゃあ、全部繋がってないんですね？

國弘 道は半周しかありません。

三浦 途中で切れてますよね。

國弘 走られる方、いらっしゃいます？『不老長寿マラソン大会』がありますので、来年、第3回目にぜひご参加ください。山道を登って、帰りは海岸線走りますけど。

是松 この道は行けるんですか？

國弘 昔の道ですので、歩くだけだったら行けます。1周できますけど、かなり時間がかかりますよ。細かい道は、結構張り巡らされてたんですよ、元々ね。でも、みんな年寄りで今はもう山に行けなくなったところとか多いから、もう人が通らないところは藪になってますからね。

是松 国東の方で、今度11月の10日に『富籤マラソン』というのがありますけど。
國弘 この前誘われたんですが、『100kmマラソン』っていうのがありましたよね？「年に2回はちょっと」って言うってお断りしたんですが。僕、四万十川のマラソンにずっと出てたんですよ。今年はたまたま国体かなんかあるんで、大会自体がないらしいんですけど。6回連続で走ったかな。7回目に抽選外れて出れなかったんですよ。去年8回目で、久しぶりだから60kmの方に出たら、途中雨が降って大変な目にあいました。今はもう走れないですよ。40kmが精一杯だと思います。練習を全然してないから。

三浦 僕は、『100kmマラソン』とか絶対だめ。スタミナ切れで。体力的に難しいでしょう。

國弘 今年は祝島の大会を、実行委員長でありながら走ったんですけど。きつかったですね。

三浦 大体、一番最初はそうだと思うよ。僕らが『富籤マラソン』一番最初に作ったときは、僕は審判長して、10km走って、表彰式自分で表彰して、そして講評して、それを2回くらいまでしたかな。きつかった。最初はそんなもんだよ。

國弘 去年が初めてで、今年は2回目だったんですよ。で、去年はさすがに走る余裕は無いから、あれこれやって。だから、今年は2回目で慣れたから、任せるところは任せて、ちょっと走ろうかなと。

三浦 13kmだって。

國弘 マラソンコースは13kmです。

三浦 何とか走れそうなかんじですね。

國弘 無理さえしなければ大丈夫です。最初は、この登りがきついんですね。ここからずっと登りが続くから、飛ばすと大変なことになります。で、下りは1ヶ所も無いですからここからここまで。全て登りですからね。その代わりに、ここからここまでずっと下りですからね。後は海岸線は平らですから。今年は風が強かったんです。向かい風が強くて。で、波が高くて、走りに来てる人はみんな酔ってしまって。前の日が特にそうだったんですね。前の日に泊まられてる方はご飯べられないくらい酔って。当日はちょっとはましにはまったんですけど。

三浦 8月は台風がね。

工藤 参加者の中には、「こんなにきついところ初めてだ」って言うてる方もいました。却って、きついって言うふうなところを名打てば、もっと参加者が増えるんで

はないかってそういうふうな意見もいただきましたよ。

是松 過酷さを売るといふか。

國弘 ほっとけば200人くらい来るんですよ。今、断ってる状態で。泊まる場所が限られてるので断ってるんですけど、だから、当日来るっていう人は結構受け付けたんですよ、今年。そしたら今度、当日の船とかが満員で、「やばいな」と思ったんですけど。それとか、向こうの港の駐車場とかいっぱいだから、「もうこれ以上は無理なんだ」と話したんですけど。

是松 なるほど。やってみらんと分かんいですね。

國弘 そっちの方がちょっと抜けてましたね。気がつかなかった。まさか駐車場がいっぱいになるとは。泊まる方は予め分かってるから、50人超えたらもう宿泊はだめだって話はしたんですけど。

是松 祝島は何人くらい泊まれるんですか？

國弘 50人ですね。今年は旅館のおかみさんがちょっと体調悪かったりとかいろいろあったりして、1軒やってなかったというのもあるって少なかったんですよ。で、ホームステイっていうんですかね、一般の家に泊まってもらったのもあるし、公共の『老人憩いの家』っていうのがあるんですよ。そこを借りて、そこに宿泊してもらったのもありますし。

(ワークショップ)

深田 では、みなさんお揃いであれば早速始めさせていただきますが。

三浦 今、祝島の人口はどのくらいなんですか？

國弘 680人くらいです。65歳以上が、400何人って確か出てましたよね、敬老の日に。

木村 この前数えたら、3分の2くらいじゃったかな。

國弘 そのくらいですよ。

深田 今日はどうも、大変ありがとうございます。私、大分県の財団法人大分県産業創造機構の研究調査課長、深田と申します。

この度、国の事業なんですけど、私どもが国から受託をされまして、国東半島と徳山、周南地域及び祝島との交流ワークショップを開催してくれというような内容の受託事業を委託したものですから、それで、2週間ほど前、時間があまり無かったんですけども、こちらの方で、『祝島ネット』さんが非常にご活躍されてるということで、事務局長の國弘さんにいろいろお願いしまして、ぜひ、こういった場を設けていただけないかということをお願いしましたところ、このような場を設定していただいたとそういうふうなことでございます。

それで、私の方からは、今回の事業の詳細を、ご説明を申し上げますけれども、

お手元に私の方で作りました、『周防灘30カイリ潮の路県際間交流事業ワークショップ資料』というのをご覧になっていただきたいんですが、これのまず1ページ目をお開き願いたいと思います。

本日のワークショップの進行次第でございますけれども、まず1番目と致しましては、私どもの方から挨拶と、それと今回の事業の内容についてご説明を差し上げたいと思います。

その後、それぞれ初めての方同士でございますので、自己紹介をお願いしたいと思っておりますけれども、この自己紹介につきましては、お名前と所属グループ、資料には書いておりますけれども、そういったことをご紹介していただきたいということでございます。

3番目に両地域と書いておりますけれども、これは徳山市の方を選定しておりますけれども、徳山市と国東半島を結んでいる、今は周防灘フェリーというのがございますけれども、その海の海上交通と、陸の高速交通のデータ比較をしておりますので、後で紹介したいと思っております。

4番目に参加者のそれぞれの地元での活動内容について、ご紹介をしていただきたいと思っております。

次に、5番目と致しまして、お互いの地域に対する理解や認識、これまでの関わり方、そういったところについて何かございましたらご紹介していただきたいと思っております。

6番目がこのワークショップの大きな目的のひとつでございますけれども、相互交流に対するアイデアとか意見等何かございましたら、時間が2時間くらいですので、なかなか時間がございませぬけれども、そのあたりご提言等あればお願いしたいと思います。ただ、いろいろなお話の中で、この場ではなかなかご意見等が出ないということもございますので、もし後日、何かこのワークショップをきっかけに、ご提案がもしあれば、原稿用紙を入れさせていただいておりますので、私どもまで送付していただければ、大変ありがたいと思っております。

それでは1番目の事業説明、今回の事業のきっかけとかそういうところをご説明致しますけれども、まず2ページ目をお開き願いたいんですが。今回の事業は、国土交通省の事業なんですけれども、『地域連携支援ソフト事業』というのが国土交通省にございます。その国土交通省に、大分県の東国東地方振興局が今回の事業を要望しております。その要望が採択になって、今回の事業を私ども財団法人大分県産業創造機構に委託がなされております。

その事業の目的でございますけれども、大分県の国東半島地域と山口県の周南地域は、祝島の神舞等古くから海を介した交流の歴史がある。現在は、周防灘を介して一衣帯水の関係にある東国東地域と山口県周南地域を『周防灘30カイリ・潮の路交流圏』として位置づけ、周防灘フェリーを交通手段とする人や

物の交流が行われており、特に地域づくりグループや女性、青少年の交流、情報発信の強化に取り組んでいる。本事業は、地域間交流や情報発信等をさらに推進するため、互いの地域への理解や共感を深め、交流人口を拡大するため、県境を越えた広域交流の推進と自立した地域社会の形成を図るものである、というのが今回の『周防灘30カイリ潮の路県際間交流事業』というものの目的になっております。

今回私どもが国から受託した内容でございますけれども、3つございまして、1番目が『広域観光マップの作成』というものがございます。これはどういったものかということ、観光マップというのは大体ご存知のような観光マップがございまして、例えば九州であれば九州の県域の観光マップと、山口県であれば山口県の観光マップというのがございまして、九州と山口の接点と言うか、そういったマップは無いんですね。ですから、今回ここで作ろうとしてるマップっていうのは、東国東地域と周南地域を中心に描いたマップというのを1枚の紙に落そうとしているわけですね。

次に2番目と致しまして、『シンポジウムの開催』というのがございまして、これは来年の1月頃に国見町で一応200人～300人、周南地域と国東地域の交流というものをテーマにしたシンポジウムを開催しようというものでございます。

3番目が本日のワークショップに係るものですが、そういったシンポジウムなどを考慮したワークショップを徳山市と祝島で開催せよというような内容の受託事業でございます。それで、本日のワークショップの目的でございますけれども、それぞれの地域おこしリーダー、地域の住民を交えて、こういった懇談会を開催し、地域の活性化や相互交流に対する意見や提言をまとめ、できれば来年1月に開催されるシンポジウムの冊子に掲載などを考えております。それで、3ページ目は私ども大分県産業創造機構の事業のご説明としておりますけれども、私ども財団法人大分県産業創造機構は大分県の外郭団体ですね。ということで、中小企業の支援というのが大きな、本来の本業でございます。ただ、その中で、私ども研究調査課、上から総合支援課、地域産業育成課、研究調査課と3番目にございまして、研究調査課の仕事と致しましては、県の経済動向の把握や、将来展望等地域振興に関する調査ということで今回、東国東地域、あるいは周南地域の地域振興に関する調査ということで、国土交通省からこういった事業を受託していると、そういう流れになります。

それで、本日の日程でございますけれども、4ページ、5ページ目ですが、実はこの資料は徳山でも使いました資料ですが、本日昼、12時から14時までは徳山で徳山の地域づくり等されてる方々とワークショップを開催致しました。それから、JR、連絡船乗り継ぎましてこちらに来まして、今

祝島でワークショップを開催させていただいてるようなことでございます。それで、5ページ目は徳山と祝島と一緒に資料掲載しておりますけれども、本日のワークショップ参加メンバーの方々のお名前等、掲載させていただいております。以上のようなことで、ワークショップ進行次第、1ページに戻りますけれども、1番の私ども財団からのご挨拶と、若干の資料の説明ということにかえさせていただきます。

それでは、2番目に移りたいと思いますが、自己紹介を国東側のからお願いできませんでしょうか。

三浦 こんばんは。今日はお世話になります。私、三浦と言います。そこに書いてありますように、小学校の学校事務をしております。現在、昨年度、今年と『東国東地域デザイン会議』の会長ということで、やらせてもらっております。『東国東地域デザイン会議』っていうのは、国東半島をどういうふうにデザインするのかというのがまずひとつ、それから後は、それぞれの地域おこしグループのネットワークをどうやって構築していくか、それから、どういうふうに宣伝していくか、そういう部分でできている協議会です。で、中身は研修会と、それぞれの団体の代表、それから会員等を集めて研修会を年に2回開催すると、そういうことが主な中身になっております。で、今日は隣に2名みえておりますけれども、2人はそれぞれ地域おこしグループの会長さんをなさっているという方です。私はそういう関係で、デザイン会議だけということで、詳しいことはまた2人がそれぞれの団体の活動内容を紹介してくれると思います。

丸山 国見町から参りました丸山と申します。仕事は、書いてありますように消防職員でございます。で、国見町にうちの出先というか元の出張所がございますので、そちらに勤務しておるといようなことであります。『デザイン会議』の方は副会長というようにしておりますけれども。

先ほどお話にありましたように、国見町で俗に言う村おこしグループの代表というかたちでやらせていただいております。『923じゃあねえかい』というのがありますけれども、『クニミ』というのは数字で『923』と書きます。で、後はひらがなで『じゃあねえかい』と、単純に語呂合せですね。そこへんで、いろんなことをちょこちょこやっておるといようなところであります。

それ以外に、スポーツ関係も少しづつかじっております。国見では、体育指導員というのがありますけれども、体育指導員の委員ということで、そちらの方にも加担しておると。何かあれば、大概私の方が加わらないけんよなことでやっているといようなことでございます。

後ほどいろんなお話ができればなと思っております。よろしく申し上げます。

是松 こんばんは。私、国東半島の空港があります、安岐町という所から来ました。私は安岐町の方で、『明日を見つめる安岐21』という会がありまして、そのの

会長を今しております。そこで国東半島の1周トレッキングということで、2泊3日で40kmの山道を歩くというのを年2回しております、今年が25回、今度秋にあります、それが25回の記念大会ということで今準備をしております。毎年春と秋にやって、毎回40人ずつくらい参加があって、お寺に泊まったりしております。後でいろいろお話できればと思います。よろしくお願ひします。

深田 では、木村会長さんよろしいでしょうか。

木村 木村です。中学校に勤めています。國弘君が『祝島ネット21』を一緒に作りませんかということでやらせてもらっています。祝島出身です。中学校の15年目になりますけど。祝島が好きで、昔あった山道など、今は通れなくなってるんで草刈りなどして、それが主な活動です。よろしくお願ひします。

國弘 國弘です。よろしくお願ひします。一応『祝島ネット21』の言い出しっぺみたいなかんじにはなってますけれども、私はずっと関東の方に15年くらい勤めてて、2000年、神舞があるちょっと前に祝島に帰って来たんですけども、その前から祝島の出身者、僕だけじゃなくて、神舞のときとかに帰って来て話すと、「なんかしたいんだけど、こういう場がない」と言うんで、「なんかない？」っていう話を結構聞いてたりしたし、神舞のとき、年寄りが多いのでなんか手伝ってやりたいんだけど、帰って来れば分かるんだけど、帰って来るまでにそういう話が来ないから、なかなか手伝えないとかいうこともあったりして、そういう祝島出身者で、外に出た人でも祝島のためになんかするっていうのができないかなっていう意見がちらほらと聞こえてきて、たまたま僕が祝島のホームページを作ったもので、そういう話が入ってくることが多かったんで、帰ってきて、結局言い出しっぺということで、作ったんですね。2001年、神舞の次の年ですね。2001年の1月1日にどうせならやろうということで作って、私じゃちょっと箔くがつかないんで、木村先生に会長をお願いして、私は事務局ということで立ち上げました。だからまだ1年半、もうちょっとで2年になりますね。また詳しい活動内容は後で。

工藤 工藤百合子と申します。今年の3月までは私は青森県の黒石市のほうに住んでました。黒石市の教育委員会で社会教育指導員を5年間やってまして、今年の3月15日に社会教育委員のほうに任命されました。夫は郵便局員なんですが、祝島の郵便局がひとつ空くということで、こちらのほうに希望を出しておりましたら3月26日に内示をいただきまして。というのは私自身が祝島出身でして、夫は青森県なんです。両親ももう2人とも送りまして、まだ私のほうの両親がこちらに健在ですので帰って参りました。そして、夫は決まったんですが、私はどうすればってということになって、まあ、教育委員ってというのは月に1回会議があるだけだからということで、受けた以上は1年間くらいは続け

なくちゃいけないって、そういうふうに思ってたんです。で、1ヶ月に1回青森のほうと往復しようと思ってたんですけども、そんな簡単な仕事じゃないってということで、4月9日に辞職願いを出しまして、夫より10日以上遅れてこちらのほうに帰って参りました。4月からこちらのほうに帰ってきて、夫が郵便局なんで、私も5月から非常勤で出てくれないかということで、5月から、今、この郵便局勤務ってなってますけれども勤めてます。

青森の黒石のほうでは、男女共同参画社会の推進のために、海外派遣、デンマーク、ノルウェーに視察に行ったり、女性の船、青森から鳴海埠頭まで、2泊3日で参加したり、いろいろそういうふうなところでむこうのほうでは活動してきました。ですから、こちらのほうに帰ってきてからまだ6ヶ月なんです。そして、何も無いところですので、じゃあ私もってということで、『祝島ネット21』の会員に参加させていただきました。また後ほど。よろしくお願いします。

深田 どうもありがとうございました。それでは、時間がこういう時間ですので、お食事をしながらということをお願いしたいと思います。それで、私どもの方が受託事業でやってるものですから、報告書を国の方に出さなければいけませんので、写真を撮ったりしますがご容赦ください。それではよろしくお願い致します。

では、この資料の6ページをご覧くださいと思います。これは、徳山と国東地域の交通事情というか、そのあたりを書いておりますけれども。国見～徳山間、これは全て自動車1台に人が1人乗って、片道ですけども、通行したときの時間と金額、経費を書いておりますけれども。フェリーで国見から徳山に渡った場合、時間は2時間だということで、このときフェリー代が車とドライバー1名分なんですけれども、普通車は大体5m以内なんですけど、これが、11,500円くらいかかると。じゃあ、高速道路等の道路を歩いていった場合はどうかということになると、国見から東九州自動車道とか中国自動車道、山陽自動車道を経由して徳山まで行きますと、3時間40分くらいかかるんじゃないかと。そのときに高速道路料金が7,800円くらいと、ガソリン代が2,730円かかるので、合計で10,530円ということになります。これを比べた場合には、圧倒的に、時間的にはフェリーを利用したほうが国見からは早いということにはなります。ただ、経費的にはあまり遜色ないと。それと、車の場合ですと、通常、車にドライバー1名ということはあまり考えられないですね。何人かご家族連れとか3人、4人乗ってくれば、フェリー代のほうが当然高くなりますからね。そうなった場合は、車を運転して疲労はたまるけれども、やはり来るまで行った方が経費的には安いのかなと。いわゆる、人数が多くなれば、ですね。そういったことが考えられます。

次に、宇佐～徳山間ということで、宇佐というものを入れているんですが、宇佐

市というのが東九州自動車道の通過点になって、要になります。宇佐市からですと、フェリーを利用すると2時間50分。フェリー代が11,500円、ガソリン代が280円で11,780円ということです。高速道路を利用した場合は、やはり2時間50分。高速道路料金が7,800円でガソリン代が2,380円で合計で10,180円ということで、宇佐市を起点に考えますと、時間的には遜色ないですね。そんへんの費用等も、1,700円くらい差があるんですが、そんなに変わり映えしないということです。もっとも、家族連れとかそういったケースを考えますと、車の運転の疲労はたまりますけれども、高速道路を利用したほうが便利かなというようなことが考えられます。

国見～徳山間のフェリーっていうのはそれほどメリットが無いというようなことはありますけどね。

それを裏付けるように、次の7ページの資料ですけれども、最近周防灘フェリーの利用人員とか車輛数が、だんだん減ってきてるということで、ここは平成6年から平成11年までで比較しておりますけれども、その中の比較だけでも、バスの台数ですね。これは団体旅行とかになりますけれども、バス台数で言いますと、50%、マイナス51.3%くらい減っているということです。乗車人員にしても、32.8%くらい減っているということになります。

で、一番ピークのときに、平成3年なんですけど、周防灘フェリーは大体20万人くらい利用があったんですね。20万人くらい利用があったんですが、今はどのくらいかという、大体10万人くらいということで、周防灘フェリー自体の利用者数は、ピークの半分くらいになっているわけです。

次に、8ページですね。大分と山口、このデータは徳山市さんともワークショップをしたものですから、徳山、特に、来年の4月21日に合併して周南市になるということで、徳山の2市2町と上関町、こちらをデータとして掲載しておりますけれども。

特に9ページを見ていただくと分かるように、大分県の中で一番高齢化率が高いのは国見町なんですね。大分県の中でも高いのが国見町で39.2%。こちらの上関町さんだけで比べても、上関町さんのほうは43.5%でかなり高いと。で、先ほど國弘さんから伺ったところによると、祝島のほうは60%超えているような状況であると。年齢構成はそういうようなことになっております。

次に、10ページですね。10ページは、祝島さんの方と直接的な交流は無いわけではございますけれども、徳山市さん、周南地域の方とはいろいろ交流事業をこれまでずっとやってきてるんですね。ここは書いておりますので、ひとつひとつはご説明致しませんけれども、最後『周防灘30カイリ潮の路県際間交流事業』というものが、今回の事業もこの一環ですね。こういった事業を毎年続けておりますが、今回は特に国土交通省さんの支援の下にこういった事業

を実施している、こういう主旨の一環でやっているということです。

11ページ目は、『神舞神事』についてですね。これは、特に私の方がコメントするまでもないことでございますけれども、この点、さきほど徳山の方でこういった繋がりがあるということを説明しました。一応、私の方からはそういった交通事情とか、データの比較を若干させていただいております。

それでは、次に4番目ですね。そして、先ほど自己紹介をしていただいたわけですが、さらに一步踏み込んで、詳しい地域づくり活動などを、それぞれの地元での活動内容について参加者のみなさんからちょっとご紹介をしていただきたいと思いますので、じゃあ、丸山さんの方からよろしいでしょうか？

丸山

では、私の方から活動内容ということで。祝島さんは私が住んでる国見町、特に『伊美別宮社』とは切っても切れない仲ということでもありますので、4年に一度お会いするということになります。当然、私も『伊美別宮社』の氏子でございますので、毎年指示がありましたら、伊美が全部で8行政区、伊美別宮社の氏子の中が8行政区に分かれてますので、毎年お当番ということでお祭りをするのに、10月なんでもうすぐ始まるんですけども、順番で回ってます。後2年くらいしたら、私どものところがしますが、2004年にあたるんかなと思ってます。先ほどのお話にあったように、私も若い人たちの中にまだ入っておりますので、当然表に出ることもなく、前回私の関わった別宮社のお祭りでは、賄い方代表ということでもありますので、毎回飯を食って終わったというようなことになりますけれども。内容は決まっております、品数とか全部決まっております。別宮社の関係はそういったようなことでもあります。

個人的には、先ほどお話ししましたように、『923じゃあねえかい』っていう会をしております。平成元年頃からなんですけれども、ちょうど目の前に姫島という島がございますので、そこに「イカダで渡ろうやないか」ということで、イカダレースというのを、一等賞金30万円というレースを8回ほどやったんですが資金繰りに窮しまして、というような状況であります。この会は、何かあると、まあ、世間で言う「つまらんこと」というか、とんでもないようなことをやっております。

観光パンフを今日お持ちしたんですが、ケベスの入った国見町のパンフを見てお話ししたいと思います。それを見開きで開いていただくと、右のページの中ほどくらいに、『ふるさと展示館』っていうのが出てくると思います。岐部っていうところにあるんですけども、こちらで、9月23日は『国見の日』でございます。語呂合せで『国見の日』なんで、ライトアップをしようということ、ライトアップをしたり、そこでお月見をしようとか、そういうことをうちの会でやっております。先月はたまたまこの展示館ができて5周年で、それも併せ持って、『お接待』をやったりとかいうことで、うちの方の担当はライトアッ

プというようなことでやっております。

それから今年、去年からもう始めてるんですけども、もうひとつ『みんなかん』っていう公民館みたいな学習センターを作ってますが、そこでクリスマスツリーとイルミネーションをやってますんで、今年もやろうとか、こういった俗に言う「たいしたことない」「あほらしい」みたいなことをやって、自分たちが楽しもうかという話でありますんで、そういったグループをしております。後は、先ほど言ったように、スポーツ関係、たまたま私が体育指導員してるってことで、多分始めて28年くらいになるのかな、で、たまたま世間で知れてるところは知れてるんですけども、国の施策の中で、『相互型地域スポーツクラブ』を作りましょうというようなことで、今全国的に展開されてますので、それを国庫補助金をもらいながら、去年から取り組んでいるというようなことでございます。その内容っていうのは、週に1回以上、スポーツする人口を50%以上にしましょうよっていうのがあります。現時点では、20~30%の間を行ってますので、少なくとも週に1回は、国民の半分が何かスポーツができるような。で、当上関町祝島も関係してきます。2010年までに、全国各市町村にはひとつはそういう『相互型地域スポーツクラブ』を作りましょうということを文部科学省が提唱しています。第1期政策で動いてますので、そういう形の中で、こちらの方も関係してくるんだろうというふうに思います。特に私の方で推進してるのは、去年からの事業では、『グリーンツーリズム』に対抗しまして、『スポーツツーリズム』という形で今取り組んでいるところがあります。スポーツを通じて地域交流をしようじゃないかと、で、学生さんが合宿をしてくれたりすれば、うちの条件に適合すれば、宿泊、体育施設等を安くしてあげたりとかいうようなことでやっています。大学の学生さんが合宿する場合、子どもたちにスポーツを教えてくださいというのが条件です。で、小さい子どもが遊びに来てすると、交流試合みたいなのをやってくればそれでちゃらというか、スポーツ施設の使用料を無料にするとか、宿泊施設が安くなるとか、そういったようなことをやろうかなということ、実際去年も、ある大学が来まして、合宿をして、その人たちが卓球部だったので、卓球を地元の人たちに教えてくれたと。下の子が、小学校2年生くらいから、80いくつのおじいちゃん、おばあちゃんまで来まして、卓球を教えてくれたと。ということで、そういった形の交流を、来れば何か交流をしていただければ、何か生まれるんじゃないかなと。たまたま卓球が流行りというか、結構国東では流行ってますので、そういったことをやろうかなということです。今、『グリーンツーリズム』っていう言葉が非常に流行ったりしてるんですね。で、『グリーンツーリズム』に対抗するのが『ブルーツーリズム』っていうかな。海で交流しましょうよというのがまた新しい言葉で流行って来つつ、多分なると思います。それに対

抗するものということで、『スポーツツーリズム』ということで、今私どもの方は取り組んでいるというようなことであります。

それにつけても、私も大変スポーツ好きですし、世間から言うと『村おこし』なんですけれども、何が基本かと言うと、自分が一番楽しみたい、自分が住んでる町がどれだけ自分が住んでて住みよいか、ということをしたいただけの話なんです。特に、人にどうのこうの言うというか、まず一番に自分が楽しい町じゃないと、自分が住んでておもしろい町じゃないと、人が来て何でおもしろいかなってという思いがありますんで、そういう意味でいろんなことに取り組んでると。で、毎年落語家を呼んできて、落語の会をしたりとかいうことも実はやってるんですけれども、そんなのも、自分が落語を聞きたい、テレビじゃなく、東京や大阪に行かなくても、自分町の、自分の目の前で、唾の掛かる距離で落語っていったらどんなにおもしろいだろう、自分が聞きたいからじゃあ、呼ぼうよって言って、好きな人が呼んで、集まって聞けばいいことで、そういう発想というか、僕自身はそういう思いでいろんなことをやってるというのが現状で、そういうことで一応は終わります。

是松 私は、先ほど言いましたように、安岐で、『明日を見つめる安岐21』という回をしております。平成元年に会ができて、それまでは安岐町っていうのはあんまりイベントみたいなのは無かったんです。今回起こそうということで、安岐町というのは細長い町で、一番奥に『安岐ダム』というのがあるんですけど、そこでイベント『桜まつり』をやろうということから始まって、そして、国東半島の自然がきれいだぞってということで、トレッキング、好きな人間が集まってやろうということで、実際は春夏秋冬4回やろうということだったんですが、ちょっと4回はスタッフがなかなか難しいもんですから、春と秋、2回、ちょうど新緑の季節と紅葉の季節ということで、いい時期を選んでするようになりました。そして、14年経つと、結構いろんなグループが出てきて、今、安岐町では毎週土日、何かイベントがあるもんですから、結構大変です。で、安岐町のネットワーク、まあ、『デザイン会議』みたいな感じで、安岐町の中にもそういうのができてきて、お互いに連絡しながら、この前も『ルーラルコンサート』っていうことで、安岐川を使ったコンサートをするグループがありまして、そのバックアップをいただいて、地元で有名なバンドが演奏したりとか、夏の盆踊り大会を企画したりして、盆踊り大会が今年は多くて、2日間続けて盆踊り大会が安岐町であったりとか、逆にやってもいいのかなというようなそっちの方の不安が。地元でみんな集まってやるようにしてますね。そういう面では起爆剤にはなったかなとは思ってるんですが。安岐町というのは先ほども言いましたように、細長い町で、その中に神経みたいに川が走ってますが、その川を使ってレクをしようかなと、会長になったと

きから考えているんですけど、なかなかできません。だから、上るレースって
いうことで、『下らんレース』をやろうと。川登ですかね。上りますから、下る
ことは無いですからね。それで、『下らんレース』をしたいなと思ってます。そ
ういうことを今、企画してます。

最近、テレビなんかでも、川とかそういう環境問題についてコマーシャルが流
れることもありますし、結構川に興味を持ったりということで、学校の先生な
んかも、ほとんど学校のすぐ横に安岐町はよく川があるもんですから、川でみ
んな繋がるっていうか、そういうネットワークができればなと思って考えてお
ります。

で、さっき言ったように、絶滅種なんかの『あかぎ』とか、いろんな珍しい魚
もまだ、極少ですが生息してますので、そういうのを、大分県には『マリンパ
レス』っていう水族館があるんですが、そこの人も調査に来たりしてます。今、
安岐町はこれから、『川ガニ』の時期なんですけれども、それが、県外の業者が
いっぱい入ってきて、熊本とか、佐賀、福岡の方から泊まり込みで来て、網を
いっぱい仕掛けて、それが、一匹200円ちょっとで売れるもんですから、根
こそぎ取って行くような雰囲気、早く組合を作りたいなとみんな話してる
んですけどね。それには、カニで生活してる人が実績を作らないとだめだ
ということで、だから、その川で、今、『裸足で歩く会』とか、『鮎のつかみ取
り大会』とか、『川ガニ』を採って、町に『梅園の里』っていう研修センターが
あるんですけども、そこで、『ガニ汁』とか『ガニみそ』の料理とかを作らせ
て、そこで供給するっていう形で、少しずつ実績作りを今してます。

今、安岐町にはいっぱいいろんなグループが出来だしたから、それが楽しみな
んです。

それと、僕なんか、もうひとつ、一番、ちょっと『神舞神事』とは違うんです
けど、大阪の住吉社のお祭りで、『川船』というのがあるんですけども、豊後
高田ではよくお正月にあります、それは1月の境目、僕たちは6月、夏のちょ
うど境目のときに、これまでの自分の健康への感謝と今度夏へ向けての祈願と
いうことで、それは闇夜にするんですよ。旧暦の6月29、30日、闇夜に、
川にずっと火を焚いて、船が船団組んで上って行くんですけどね。それが結構
勇壮で、それが、36年の水害とか、安岐川に空港ができた関係で橋が架かっ
たりしたもんですから、途中途切れてて、これをそのときちょうど僕が青年部
長だったもんですから、真似事をやって、正式じゃないもんですから、それで
みんなが発奮してくれて、今、町の方のお祭りとして取り上げてもらって、5
年目なんですけどね。でも、みんなやっばり年をとって、昔は地区の祭りとか
いうとその地区が、ケアリーダーとか、役割分担があったんですけども、人
がいないからもうちょっと出してくれて言われたりして、だから、町の祭り

になったもんですから、公募してやっていこうと。それと、できれば子どもケアリングを作ると、親が空きますから、学校とタイアップしてやろうと思っ
ます。以上です。

國弘 子どもさんはまだまだたくさんいらっしゃるんですか？

是松 安岐町はちょうど、空港のある町なもんですから、企業が結構あるんですよ。

國弘 じゃあ、若い人が結構。

是松 多いです。地元以外の人だけで、子どもさんが、学校が、新しい感覚というか、世の中変えて行くのは、若者か、ばか者か、よそ者かってよくねえ。だから、しきたりとかをあまり意識しないで、ばんばん意見を言えるっていうのがいいんじゃないかな。だから、いろんな面では、今はまだバランスが取れてるんで、地元が少なくなってきたときにどうなるかっていうのはありますけど。まあ、その人たちを早く地元民にしてしまっ
て、引っ張り込んでいけば。小学校は、今、約300人、生徒数があるんですよ。小学校が5つあって、多いところと少ないところとありますんで、小学校の運動会なんかになると、地区の運動会みたいになって、子どもより大人の方が出る回数が多いというか。

國弘 私らもそうですね。子どもが4人しかいないから。この前、深田さんがいらっ
しゃったときにちょうど運動会で、学校まで上がって来てもらったんですけど、小学生が1人と、中学生が3人で4人だけなんで、大人の方が多そうですね。でも、子どもの方が結構競技には出るね。出ずっぱりというか。

木村 競技は子どもの方が多いよ。競技数は。

深田 でも、感心したのは、応援団が元気がいいんですよ。応援してる人は、平均年齢70から80くらいでしょうか。で、参加してる人は、50から60って
いうかんじでしたけど。元気がいいんですよ、ほんとうに。なかなかああいうふうな応援は、普通の学校の運動会じゃね。あそこまでしないなど。

國弘 まあ、学校まで上げられる人は元気いいですよ。あの坂を上がらないけんから。

深田 今、安岐町の子どもさんの数とかいう話が出ましたが、安岐とか武蔵は先ほどのデータ資料を見ていただくと分かるように、5年間で増えてるんですよ。国東でも、安岐、武蔵は空港の町なんですけれども、こちら非常に企業立地が進んでお
りまして、また、ベッドタウンというか、住宅開発のまとまったものがされてお
りまして、この5年間では逆に人口が増えているというふうな状況になってお
ります。国東から上、ここは非常に衰退していると言え、衰退しているというか。

丸山 国見が一番衰退してますね。人口も減ってますし。

是松 昔、陸の孤島ってよく言われてたから、その分、内側でいろんな仏教遺跡のところですから、逆に、今、使えてるというか。あんまり開発されてたら、今度はおもしろくないです
ね。

深田 では、国東側からのご説明は以上ということで。今度は祝島側からお願いします。

國弘 僕が基本的には丸山さんと同じで、自分で楽しめるようなイベントとかっていうのをやるのが自分としてはそれをやってるんですよ。だから時々、好きなことばかりやってるって言われることはありますけど、仕方ないんですよ、それはね。

で、年間で言うと、まず、『遠足』、祝島の山を歩く遠足です。昔はちゃんと道が通ってて、僕らが小学校くらいですね、その頃は裏の方までちゃんと道があったんだけど、今は山で働く人が年を取ってきて、段々少なくなって、人が通らなくなったんで、道自体が藪になって無くなってるので、それを刈るのは木村先生が主にやってます。遠足は冬と春と秋、年3回ですね。夏はちょっと、蛇が出たりするんで難しいんで、最初は春と秋って言ってたんだけど、正月に帰ってくる人がいるじゃないですか。そういう人が参加できるようにっていうことで。

後は、山の上に、イラストマップを見ていただくと、行者通り、祝島では行者様って言うんですけど、役の行者様の御堂があるんですよ。そこにお正月にお参りする人がいるんで、みんなでそれを参りに行こうっていう。で、冬もその遠足ができたんですけども、3回遠足やってます。で、春はちょうど花見、祝島は山桜が結構きれいなんで、その花見をやって、秋はいろいろ実を採りながら、っていうかんじで。だから、島のおばさんなんかは結構参加されるんですよ。知らない間にいっぱい持って帰ったり、僕らは何も無いのにおばさんらは収穫が多かったり。そんなかんじで3回やってます。

木村 桜はよそから来た子どもらもおってねえ、花見のときは多かったねえ。

國弘 あとは、先ほどちょっと冊数が少なかったんですが、マラソン大会、これは夏のイベントということで、『祝島不老長寿マラソン』っていうんで、今年2回目になりました。100人以上、こちらで受け入れできるぎりぎりいっぱいくらいまで参加して。去年初めてだったんで、あちこちで宣伝したんですけども、今年はある程度宣伝しなかったけど、やっぱり集まりが多かったですね。去年はKRY（山口放送）のラジオに出たり、中国新聞とかに載せてもらったりしたんですけども、今年も新聞は載せてくれましたけれども、リピーターの方が3割ちょっとで。去年は僕がちょっとした知り合いだった宇佐見さんに来てもらって、色紙も書いてもらったんですけども、宇佐見さんがわざわざ東京から自費で、招待選手、招待はできないんですけど、自費で来てくれませんかかっていことで、来ていただきました。それをやって、そのときはやっぱり、遠足は僕ら何人か行けばいいんだけど、マラソン大会になると、給水とかいろいろ、いっぱいボランティアが必要ですよ。それを、島に帰ってき

た人もいるし、だからお盆前にやるんですよ。お盆前はまだ、帰れる人は帰ってボランティアをしてもらえるし、島のおばさんらも子どもらが盆に帰ってくるから、その前だからまだ手伝う余裕があるっていうかんじで。で、遠くからも来やすいじゃないですか、お盆の前くらいだから、何とか休みを取ったりして来やすいということ。一部では、「暑いのに何でこの時期に」とか「倒れる」だの何とか言う話も結構言われたんですけど、そういういろいろな面から見たら、やっぱり8月にやるのが一番みんなが集まれるし、来た人もその後泳いだりとかできるから、いいかなとか思ったんですけども。ただ、午前中だからまだそんなに暑くはないんですけどね、坂登るところはね。下を走って帰ってくる頃は暑くなってますけど。まあ、何とか今まで、怪我人、病人出ずに2回はやりましたけど。今年は初めてリタイアが1人だけ、島の出身者が途中で家に帰って、ちょっと残念だったんですけども。

後は、いろんな活動というか、細々とした、ベルマーク集めたりとか、会報、ほんとは最初から作りたかったんですけど、なかなか手間がかかるっていうので、やっと今年から作るようになりまして、今第2号、今月第3号を出さないといけないんですけど、まだ原稿が全部集まってません。で、原稿は基本的に『祝島ネット21』の会員の人で、祝島に住んでる人もいるし、大阪とか東京とかあっちに出てる人もいるし、それぞれの得意分野とか、興味のある分野、歴史とかだったら、祝島の歴史の話を書いてもらうとか、魚の話を書いてもらうとか、植物の話を書いてもらうとか、その人その人の得意なことをやってもらうっていうかんじで、基本的には『祝島ネット21』の活動自体が、僕は、その人ができることをやってもらえばいいと、何でもかんでもやつ必要はなくて、できること、やりたいことだけでもやってもらえば、それをみんながちょっとずつやれば、結構いろんなことができるかなっていうふうに思ってるんですよ。だから、会報もそんなかんじで、僕が全部書けないっていうのもありますけど、みんなに原稿を出してもらって、まとめは僕がやって、会報って形でやってます。

木村 パソコン持ってない人も会員におるからね。

國弘 ホームページとかもあるんだけど、それも見れないとか、メーリングリストで「こういうことやります」とか、「これについてどうですか」とかいうのはやってはいますけど、やっぱりパソコン持ってない人も会員としているんで、郵便で情報を共有できるような形を何か考えなければいけないなって、去年からずっと言われてて、やっと今年になってそれが実現しました。今は年4回の予定で、まだ2回しか出してないんですけど、その予定でやってます。そういうかんじですかね。マラソン大会なんかは島のおばさんたちとかも結構、みんな手伝ってくれるんで、まあ、手伝ってもらわないとできないっていうか、あちこ

ち協力してもらわないとね。

木村 大体マラソンというのはその地元のもんがやる形でしょう。それが、外にいる人が帰って手伝うという形が新しいなど。

國弘 だから、やった人も、なかなかそういうのをやる機会ってというのがないじゃないですか、結構楽しんでくれたりとか。

是松 ボランティアってのが結構今ね。だから、都会にいたらなかなかそういう機会がなくて、いなかに来ればいいですよ。

國弘 人数が少ない分、ひとりひとりの力が重要になりますからね。

三浦 そうですね、それはありますよね。

是松 いなかに行けば行くほど、人間の価値っていうか利用価値も高くなってきますよね。

國弘 ひとり分のね。やる仕事が多いから。

是松 都会じゃ、価値が薄まってっていうか、多いから。

國弘 やっぱり、島っていうのが、離れても強く引き付けるものっていうのはみんな思ってるんですよ、どっかで、今祝島はどうなってるんかなとかね。

是松 そうだと思いますね。やっぱり、ふるさとの活気があると帰ってきても楽しいし、何かあるとやっぱり気になるし。祭りが段々少なくなっていくっていうのはそこが、地域の人間の数が減ったりっていうのがね。

國弘 そうですね。祝島でもやっぱり、昔からあった祭りっていうのが数的には少なくなってますしね。『神舞』だけは、一番盛り上がる祭りですから。あれだけは何とか続けて行きたいなど。

是松 あそこの港のところなんか家を建てるんですかね。

國弘 港というか、このへんの浜辺に今建ててますけど。あそこは前に埋め立てしたんですよ、そこに今建ってるんですけど、前は埋め立て地じゃなかったから、昔は畑を潰して、そこに建ててたんですけど。

是松 4年に1度の祭りっていうのは、逆にまたね。

國弘 だから、毎年やると辛いんですよ、これ。結構。

三浦 毎年は辛いですね。

木村 だから、江戸時代から藩を超えての交流が続いてたということですごく全国でも稀な。

國弘 そうですね。オリンピックより長いっていうか。でも、元々は4年に1回っていうふうに決まっていたわけではないみたいなんです。占いで、次はいつやるっていう、4年後だったり5年後だったり、まあ大体なんで5年後6年後があったかどうかは分からないんですけど。だから、占いで決めてたらしいんだけど。今はもう4年に1回っていうかんじで。で、僕らが子どもの頃はまだ旧暦の8月だったから、9月になったこともあるし。でもそれだと今帰って来れないじ

やないですか、なかなか。だから、お盆のすぐ後、お盆中は今度大分県から来てもらわないといけないから、向こうの人が離れられないとかいうのがあるんで、ぎりぎりのところでお盆が終わったらすぐ『神舞』をやるっていうかんじでやっています。

木村 更樂師の方ももう年取って、なかなか大変いう話をよく聞きますけどね。

丸山 少なくなりましたよね。後継ぎが無くてちょっと困ってるっていうのは聞いたことあります。

木村 賄いやりよったんですか。

丸山 任せてください。

木村 こっちでも来られた人は、婦人会の方でね。

國弘 おばさんたちがみんな賄いをやっています。

丸山 ある意味では、祭りそのものもどんどんリニューアルしていくべきなのかなと僕個人的には思ってるんですけどね。現代風に合わせるっていうか、昔からやらなければならないことはやらなくてはいけないのかもしれないんだけど、ある部分、人手が無いのに無理する必要はあるのかなっていう時代時代に合わせなければいいのかなっていう部分を感じなくもないんですよ。段々、うちの地区もどんどんどん人口が少なくなって来たじゃないですか。で、私の父が死んで、ちょうど今年で17年目なんですけど、もうそのときから世代交代ですよ。私なんかの世代の年になって、準備に出るじゃないですか、今まで17年間経ってもまだ一番若い衆、何があってもまだ若い衆、いつまでたっても下働きから上がれないという厳しい現状も実はあるんですよ。昔の人に聞くと、自分くらいの人のもう上の方で、もっと若い人が使い走りのような時代でしょう。そこへんがちょっとおもしろいのかなという気はしますけど。

工藤 そうですね。やっぱり何でも私もそうだと思います。昔のままって決して私はいいいことだけではないと思うんです。やっぱり新しいものをちょっと捉えて、今、リニューアルって言われましたけれども、そして、受け継がれて行くっていうかね。住まいでもそうであって、今の生活にマッチしたというか、自分たちの気持ちにマッチした住まい方をするっていうことが大事でないかなと私もそう思います。だから、ある意味で私祝島にこの度4月で帰って来ましたが、ものすごくがっかりしたっていうのは、いろんな意味でいっぱいあるわけですけども、自分が生まれて育った、15歳までここにいたわけですけども、それと全く変わってないわけですよ。で、変わってないことがいいことかって言ったら、私は決してそうではないと思うわけ。やっぱり、少しずつ良く変わって行くっていうことが、大事でないかなっていうふうに思います。だからこれは、何にでも通じることではないかなってそういうふうに感じています。

深田 それでは、すみません、次のステップに。一応形を踏まないといけませんの

で、第5ステップに入らせていただいて。互いの地域に対する理解とか認識、関わり等について、これまで、国東の方ですと、周南等山口県にこういった関わりがあったか、何度来たかとかですね。で、逆にこちら、祝島の方から大分県の方にどの程度いらっしゃったことがあるとか、何か参加されたことがあるとか、あるいは観光地ですね、こういったところに行ったとか、というようなご体験等あれば、お伺いさせていただきたいと思いますので、まずは三浦会長さんからそのへんのこれまでの周南とかどのようなご体験をされたかお願いします。

三浦 そうですね。先ほどマラソンのお話が出たんで、それに関係すると言いますと、防府マラソンに3回ほど。

國弘 防府って、結構エリートじゃないと出れない大会ですよ。

三浦 もう、前に出ましたけれども、そういう形で第2回目ということで、頑張ってるっていうのがすごく楽しいとね。問題は宿泊の関係で人数がどうしても制約されてしまうっていうのが少し寂しいかなっていうような気はしますけどね。で、私も国東にいるんですけども、正直言って祝島の『神舞』私も初めて知りました。安岐町はトレッキング、『安岐21』がトレッキングをやってるんですけども、それに参加して、初めて地元のいろんな部分を、歩いたときに初めて分かる部分はすごくある。で、それと同じように、私たちもいろんな伝統行事があるんだろうけれども、それをお互いに知らなくて過ぎ去って行ってる部分がすごくあったんだっていうのを今回のこれで、私初めて知りました。で、『神舞』というひとつの行事で、国東半島とここは繋がってたっていう、そういう部分を大事にして、国東半島は仏の里っていうネーミングで売り出してるんですけども、そういう中で、そういう部分も含めながら、お互い交流をどうやって深めていったらいいかなとか、そういう部分をこれから先ずっと考えて行ければいいのかなというのはあるんですよ。で、国東の場合、姫島もそうですし、国見もそう、それから武蔵もマラソン大会、トライアスロンやってます。で、安岐は是松会長さんもお尽力されておるんですけども、瀬戸内女子駅伝、先日、昨日の日曜日にあったんですけども、そういう形で、そういう部分で繋がっているんですかね、共通点はすごくあると思うんで、そういう部分をお互いの中で共有できて、そして、じゃあ、国東半島の方からは『神舞』をてごにして、こっちを知る。それから、祝島の方は国東半島の仏の文化みたいなものを知っていただくっていうんですかね、そういう交流ができれば僕はもう最高じゃなかなと思うんですよ。そして、不老長寿マラソンというような形もね。

國弘 お互いに参加したら面白いでしょうね。

三浦 そうですよ。で、富籤は結構いいんですよ。今年で3000名くらいの一応申込みがあるっていうような形で。去年は2500くらいだったんですけど。

それで、こちらの方は若干人数的に制約があるから、ある程度枠をセッティングしてもらって、例えば特別枠で10名程度なら絶対出れるみたいなね、そういうような形でも、お互いにできると、すごくお互いにいい意味で交流ができていいじゃないかなと思うんですよ。是非、そういう機会が設けられたら。

木村 国東から例えばフェリーで来て、そのフェリーを停泊させてそこに泊まるいうのもできるもんね。

國弘 先生も言いよったんですけど、あそこにフェリーを泊めて、それに泊ませりゃあいいっていうね。でも、海が荒れるとね。基本的に夏は波が悪いことは無いんですけど、今年はちょっと異常だったね。あの前、1週間くらいずっと波が高かったんですよ。

是松 台風のできるところがちょっと最近変わって来たからね。昔はフィリピンの向こうから来てたけど、東の方からずっとここに来て。

國弘 定期船が途中で駐車場があったと思うんですけど、あそこにつけられんとか言う話が出てきて、あれは普通じゃなかったね。

是松 それか、テントかなんかね。

國弘 テントの人おったかね。

木村 今年はいなかったけど、去年はひとり。そういう人ならいくらでもいいんですけどね。

是松 テント村とか、公民館とか。

國弘 公民館がね、ちょっと宿泊とかで使えないんですよ。

三浦 それとか、学校の体育館とか。来年中学校が閉校になるんだったらね。

國弘 網戸が無いから蚊が多いからね。ちょっと僕は無理かと思うんですが。

三浦 広島のスウリョウ町のカソサカに会員になって、あそこに1度行ったんですよ。そのときに行ったら、あそこは廃校を利用して、宿泊施設に変えてるんですよ。だから、教室に手作りの二段ベッドを設置して、ベッドは畳1畳くらいでちょっと狭かったんですが、そういうふうにもし可能であれば、そういうかんじでできれば、いろんな形で。

國弘 いろいろ考えれば、もっと人を増やせるのは増やせると思うんですけど。

木村 来られる人の幅もあるんですよ。そういう人もいいけど、やはり夫婦連れで一緒になってなると、旅館を希望しますから。

國弘 で、祝島に来るんだったらおいしい魚を食べたいとかいうのもやっぱりあるんですよ。

丸山 僕は逆にむしろ、ここでやるんだったら、祝島でやるんだったら、もう限定100、もう100しか受けない、その方が、むしろ希少価値が逆に生まれるのかなって僕自身は思うんですよ。もうキャパ100なんだから、100なんだよと。だから、1000人来ようが2000人来ようが、逆に言うとプレミ

アチケットですよ。申込みたい人が500人、1000人いても、100しか泊まれないとなると、10分の1の確率でしょう、プレミアチケットですよ。逆にそのくらいの価値観論があった方がおもしろいのかなというふうに。まあ今、中で言ったように、無いものを逆手なんです。無いから、もう100しかできないというか。300人来ようが1000人来ようが10000人来ようが絶対枠があるんやと。これで、出たいと言って当るっていうのはすごい価値があるんだぜっていうのがむしろおもしろいかなってね。記念のTシャツ作るのに、これが10枚しかないって言ったらもうよっぽど運がよくないと当らんような感覚でしか揃わないよっていう話。このTシャツはすごいよ、出た人でないといけないよっていう話であればね。

三浦 『富籤マラソン』は七福神、あれで1年ずつずっとやってます。

國弘 七福神が一人ずつ変わるんですか？

三浦 そうそう。だから、7回出て初めて全部揃うっていうね。で、その次は全員が載るとかね。そういうようなかんじでやったんですけど。そういうのが、もしかしたら、祝島の何かになぞらえて。

國弘 『不老長寿マラソン』というのは、祝島に不老長寿の実があって、それを秦の始皇帝が日本に探させに行き、その徐福っていう人が祝島でそれを見つけたとかいうくだりがあって、そこから『不老長寿マラソン』って付けたんですよ。マラソンのTシャツは祝島出身のデザイナーやりよる人があって、その人に頼んでいつも作ってもらってるんですけど。その徐福関係の。去年のはよかったんだけど、一部にすごい受けて一部にはすごい響きだった、去年は。今年は割合みんなに受けるようなかわいらしいのを。僕らはすごい気に入っちゃったんだけど、木村先生の奥さんが気に入らなかったみたいで。で、奥さんの要望で今年はかわいらしいのを作ったんですけどね。

深田 ちょっと、話の流れを元に戻させていただいて。次は丸山さんからどうぞお願い致します。

丸山 はい。私も似たようなことなんですけれども、接点で言えば、『神舞』ていうのがありますね。折角の接点があるんで、これをどう使うかですね。私の方からすれば、確かに『神舞』そのものっていうのは大事なものだと思うんですよ。これをもっと世間に売り出して、金儲けしようという考え、ずるい考えなんですけど。で、私自身はほんとに生まれて初めて祝島に、まあ、祝島はある程度知ってるし、4年に1回行くっていうのは地元の者ですから知ってましたし、行ってみたいっていう気はありましたけど、なかなか行かせてくれないっていうか、お前ら若い衆はまだいいやろうとずっときてたんですけども、来て、「こんなところなのか」と初めて認識をしたようなところなんですけれども。折角の接点はあるのでこれをどれだけ使うのかと、良い材料があるんなら、良

い材料を骨までしゃぶって、何かこう考えたらいいのかなと。だから、先ほどお話にあったように、フェリーをチャーターするのもいいでしょうし、こんなにおもしろいんだから、4年に1回でオリンピックのような希少価値が出てるんですよっていうことをもっと売り出して、じゃあ、それに観光をひっつけちゃおうよとかいう話なんですよ。是が非でもここで、上陸してするのも希少価値でしょうし、景色を見ながら散歩、それこそトレッキングみたいなかたちで参加させてまわるのもおもしろいでしょうし、そこへんのところをいかに上手に売りをするのかなという気はありますよね。そうすると、それなりの接点が増えてくるのかなという、逆もまた真なりっていうことですよ。こちらから行く、こちらに来る、そこへんのところをどう持って行くか、っていうことなんですよ。特に、徳山の方にはたまたまフェリーが2時間なんですけれども、今日ちょっとお話したんですけど、今2時間ってというのは非常に長く感じますね。昔、徳山に彼女がいたときに、徳山に行く2時間がすごい短く感じたような気がしたんですけど、今は時代の回転が早い、そのものが早いんで、2時間というものがほんとに長く感じてますんで、その2時間をどう利用するのか、それでここまで来るのにどう持って来るのかってというのが非常に面白いのかなって。策はいろいろあるのかなっていうふうには思いはしたんですけど。で、今日初めて定期船って言うんでうかね、船に乗ってここまで来たんですけども、あの中でも、ほとんどの人が地元の人だったんだと思うんですよ。外部の人は我々5人くらいかなっていうふうに思ったんですが、これがシーズン、今がオフシーズンとは思わないんですが、シーズンになり、それなりに人がたくさん乗るときがあったら、もう少し祝島のビデオを置くなり、テレビを置くなり、アナウンスかけたり、途中で景色がいろいろ変わりますんで、大分県では見れない海岸線なんかもあるんですよ。で、あれはどんな岩だとか、いろいろ地元では名前が付いてると思うんですよ、あれが何岩だとかですね、その説明が流れてくると、非常に乗ってて楽しいのかなっていうふうには思ってます。来る途中はずっと思っていました。だから、そんなかたちでいろんな価値が生まれてくるのかなと、だからそれを逆に利用すると、大分県の間人も行ってみようかなと思ったりもするし、そんなことを多いに利用していくっていうはどうなのかなと。ほんとにばかばかしい話なんですけれども、こちらでも徳山でもお話ししてるんですが、ほんとに実際僕らがしようかなと思ったのが、のろしを上げようかと。火を焚こうと。大きなのろしをどんどん上げて、見えたら、例えば国見からのろしを上げるじゃないですか、そして、見えたぞってなったらこちらの人材がまた火を焚いてくれるんですよ、で、見えたのか、すごいなってただそれだけの話なんですけれども、そんなばかばかしい、昔の人はそういうことで通信をしたのかなとかいう意味合いのことで、自分たちの思いが

煙というひとつの方法で届いたのかとか、で、答えてくれたとか、徳山の人にもこうやって送ったら、ああ、届いたとか、届かないとか、そういうばかばかしい話がほんとにそれの方がおもしろいのかな、今の時代にマッチしてるのかなというふうには思ってます。で、ほんとにやろうかなっていう話で、話が出たんですが、とりあえずはイカダレースを僕らがやってるときに、いや、姫島に行くんじゃないと、祝島までいっぺん行ってみようやという実は話があったんです。だけど、イカダで祝島まで行きつかんぞってという話になって、でも行かんこの話はできんぞってという話実はあって、それがちょっとぼしかったんで、棚上げの状態になってるんですけど、実際にあった話で。

國弘 いや、実はカヌーで姫島まで行く言う話があったんですよ、2人の間だけで。まだ実現はしてないんですけどね。去年はそう言いよったんですけど、去年、ここから光市のムロズミまで行ったんですよ、カヌーに2人で乗って。来年は姫島とか言いよったんだけど、まだ行ってないけど。

深田 サポーターがいないとだめでしょう。厳しいんじゃないですかね。

國弘 そんなことないでしょう。何かあったときは大変かもしれんけど。天候次第ですね。

丸山 だから、僕はもうずっとイカダ作って、で、漁船で横ついてもらって行こうやっていう話をしてたんですけど、人間の方がもたないやろうなっていう、だって、ずっと漕ぎっぱなしでしょう、漕がないと潮に流されてしまうから、イカダはなかなか進まんから。で、上陸して、そんな話をして、よし、何月何日の何時ごろから火を焚けと、それで合図をやろうと、で、上がったみたいな話ですとおもしろいのかなと。昔の原始的な世界っていうのはこんなもんだったんかなと、インディアンののろしじゃないんですけど、そんなのもおもしろいんじゃないかなという話は実際あった話なんで。そういう素朴な交流みたいなの方がおもしろいかなっていう気はしますけどね。

木村 僕はいつも、土日、釣りに出よるんですよ。出たときには、姫島、国東を一番見るんですよ。島影として。今日は見えるなとか。見える日、見えん日ありますよね。で、10年くらい前か、姫島には3、4回行ってんですよ。泊まって。宇部でマラソンがあって、そのあくる日に姫島に行って、春休みだったんですけどね。で、姫島から向こう見たかんじと、こっちと大体似てるんですよ。でも、向こうの方がすごい、いいなあ、思うのはありますね。ひとつは、村でしょう。村がまとまって、いろんなことをいろいろやれる言うか、あれがすごいなって思いますね。で、姫島で僕が感じたのは、特産品が無いな思うたんですけどね。まあ、祝島なら特産品作るのはやっぱり大事なかなと。ただ、向こうはいろんな待合室もいっぱいできて、いいのがあって、そういうのがあれば、すごい売れる体制がすごいできてるんですよ、いろんな形で。貸自転車

あるし。そういう面で、ああすごいな思うて。姫島は、やっぱり注目こっちでしてる島なんですよね。意味もあるし、結構。これで見たら、120分じゃけど、ここの清水丸なら65分なんだよね。柳井と一緒になんですよ。だから、そういう交流言うのは、やっぱりすごい近い、海を通せば近いんですよ。『神舞』でも姫島丸来るんですよ。毎年、毎回。で、見て、帰って、上陸したときもあるんですけどね。あの波頭の先を壊したのも姫島丸。こうちょっと狭いから。フェリーは滅多に来ないから。だからそういうかたちでの交流というか、昔ならあったもんです。だから、のろしだって絶対あったはずですよ。向こうの方にムラカミスイグンノシオがあった言うから、上げれば必ず見える、晴れた日なら見える、だからのろし言うのは今おもしろいな思うて。

丸山 今日『神舞』だから行くぞとかね。

木村 絶対何かの合図はあったと思いますね。無線も無い時代にね。島におったら、海関係でいろんな発想が出るような、たまたま秀人君もカヌーが好きで、同じ頃僕もカヌー買ったんですよ、組立て式の。僕がちょっと早いくらいやったかね。それで、1周したりね。で、マラソン、ランニングも結構、今膝が痛いんじゃないけど、結構するんでね、そういう共通点も。トライアスロンも年に1回はやりよるんです。

國弘 泳ぎが全然できなかったね。他は勝てるかもしれんけど、泳ぎはねえ、なかなか。

木村 ああいうのにカヌーを入れたりでもしてもいいかなって。この向こうのあそこから水泳大会もできんかな思うてね。3.5 Kmか4 Kmくらい。

國弘 結構きついですよね。で、波もあるし。

三浦 だって、佐伯が2 Kmないくらいやから。でも、やっぱり流れはきついんじゃないですか？

木村 船で伴走してもらったけど、結構流れはきついね。サメが一番怖いね。だから、いろいろ考えればできることはありますよね。この、『潮の路』言うのもすごいいいな思うて。名前がね。

國弘 やっぱり祝島とか、あんまり景色はいいと言えはいいんじゃないけど、結構あつと言う間に終わるかんじなんですよね、狭いからね。だからあんまり観光言うかんじよりも、何か祝島に来て体験する、何か体験をして、っていう方が楽しめると思うんですよ、祝島は。で、山歩きでもいいし、海を泳ぐんでもいいし、カヌーでもいいし。

丸山 スナメリは見えるんですか？

國弘 時々見れますよ。

木村 時期によりますかね。あと植物もあるしね。

國弘 さっき言った、島のガイドができるようになりましょうっていう活動もやって

て、僕らも参加するんですけど、僕はあまりそういうの苦手な方だから、なかなか覚えられないんだけど。ミナミ先生っていう、山口県の植物学会の一番偉い人、山口県の会長、その人に2回来てもらって、僕も行ったんですけど、島のいろんな珍しい植物、祝島独特の植物っていうのがやっぱり多いみたいなんですよね。

工藤 この間、私のところに青森からお客さん来たときに、どういうふうなことを言われたかっていうと、星がすごくきれいじゃないかって、祝島から見る星がね。だからそういうふうなこともやったらどうかっていう話が出てたんですよ。

深田 すみません。すでに交流のところについておりますが、基本部分はまず、お互いの地域に対するこれまでの経験とか、そういうところですから、ひとつずつ踏まえてひとつよろしくをお願いします。

國弘 じゃあ、私も大分県に。実は、6ページのこの図のこのルートは、僕が小学校のときの修学旅行のルートなんですね。徳山までバスで行って、徳山からこのフェリーに乗って、大分に渡って、宇佐神宮行って、阿蘇行って、この北九州を通って帰ってきたんですよ。まさしくこのルートを小学校の修学旅行で行きました。で、中学校もこれだったんですよ。中学校はほとんど同じ。小学校は北の方だけなんですよ。中学校は長崎と熊本とあっちの方まで足を伸ばすかんじで。だから、大分自体はその後、大学生のとき、バイクでツーリングに行ったりとか、阿蘇とか別府とか行きましたよ。別府の温泉の中で写真撮ったりね。結構、大分県は行ってますね。国東半島としては、修学旅行のときに通ったくらいなんですよ。

深田 じゃあ、西の方ですね。東の方に来たことはないんですね？

國弘 松山からだったから、松山から別府っていうのはありますよね。あれで行って、阿蘇の方走って、宮崎とか行って。高千穂も行きました。

深田 では、宴たけなわとなっておりますが、最後のところですね。6番目、相互交流に対するアイデアと、いよいよここが本題ですけどね。それぞれの地域の活性化策というか、いろいろ今ご発言があったわけですけど、相互交流っていう観点から、何かご提案とか意見とかございますでしょうか？

三浦 さっきから話してるように、いろいろ共通点はあるわけだから、要はそれをどういう形で具体化していくか、そこが一番難しい部分になると思うんですよ。先生が姫島に何回か行かれたっていう、そういうのをいっぱい広めてもらう以外にちょっと、難しいかなっていう。僕らはやっぱり、ほんと祝島を知らない人の方が多いと思うんですよ。それを、ほんとに広めて行かないと、そこでの接点が、ほんとに話だけの接点で終わってしまうという。

木村 だから、感覚的には、祝島は柳井と同等距離に国東港があるんですよ。だから、向こうはそうでもないと思うんですよ。だから、徳山経由でなきゃ来れない、

ここに来る気があるか無いかは分かりませんが、でも、来ようと思えば来れるところなんです。だから、『神舞』のときに来ようと思えばフェリーで来てる人はおるんですよ。そこの国東の伊美神宮周辺の人は100人くらいのフェリーじゃったかね。だから、上陸するかどうか言うのは1回目、2回目は上陸したね。そういう交流はあるんですけども、あまり広がっては多分ないと思うんです。だから、感覚的には島の者は近い感覚なんです。国東半島の両子寺、あそこ僕も上がったことあるんですけどね。あれが見えるんですよ。だから上がったならあれが両子寺言うのは分かるんですよ。だから、そういう感覚をこう広げると、交流はやはり広がるんじゃないかなと思いますけど。まあ、マラソンもあれじゃけど。いろいろ、1回行ってみるとね。

國弘 だから、ここだったら、こう回って来るよりも直接こう船で行った方が近いし。やっぱりあれですよ、大分の人じゃなくても、徳山とかあのへんの人でも祝島言うたら、ものすごい行くのが大変なようなイメージがあるんですよ。僕らから見たらそうでもないんですよ。すぐ行ける場所ですからね、徳山なんていうのは。

木村 夏にカヌーで来てる人がいて、6時間くらいで大分に渡ったみたいです。ここで、2、3日泊まったみたいです。だから、ここに来て、ちょっとしけたみたいなんです。だから島の人泊まれ言うて、饞別を1万円あげた言うてました。で、出発して、6時間以上経ってからでしょうね、電話があって、着いた言うて、そういう、やっぱり昔の人はそうでしょうね。そういう感覚で。だから、のろし言うのは絶対いいですよ。のろしは。

國弘 結構祝島の漁師さんなんか、向こうに行ってますから。別府の温泉に入ってくるとか言って、漁船で行ってますよ。

木村 親父らはよう行きよったんですよ、太刀釣りとか。

三浦 じゃあ、こっちからは結構あるけど、向こうからの方がかえって、僕らの方からの、やっぱりコンタクトを取らないっていうか。

木村 絶対そうですよね。こっちからは他方、360度、ありますからね。でも、向こうにとっては、地元の方の見る言う目が、山もあるし、だから、島の者はやっぱり見ますよね。ちょっと霧でもあったら、島に帰るのが松山に着いたり言うのはありますからね。だから今、エンジンがあるから、もうすぐ着きますからね。ちょっと間違っただけ2時間走れば、もう四国じゃから、九州でもね。

三浦 距離的には、ほとんど等間隔の位置に恐らくあるようなかんじになるんかもしれないけど。

工藤 でも、私なんかの感覚からすると、国東半島って、山道の近いけれども未知の国って言えばおかしいですけども、私は徳山から別府まで行って、別府から湯布院を通過して、やまなみハイウェイをずっと通って、熊本まで行ったんです

よね。だから、そういうかたちでルートに行くけれども、なんとなくまだ遠いって感覚するんですよね。だから、今度は是非行ってみたいなっていうふうにこの度の資料見て、思いました。で、祝島では特産物って、石豆腐ってありますけど、女性の感覚で私は言わせてもらおうと、国東ではどういうふうなものがあるんでしょうか？食べ物ですね、自分のところしかないというような。

三浦 自分のところしかないっていうようなのはないですね。

工藤 例えば祝島だったら、石豆腐はここしかないって。海の水を使って、にがりを作って、硬く作って、昔からそれを食してたっていうふうなものがあるじゃないですか。だから、そういうふうな文化交流、食を介した文化交流もおもしろいって、私なんかはまた女性の発想で、そういうようなことも考えます。

木村 姫島は、車エビ、発祥くらいじゃないんですか？

三浦 一番最初のね。

木村 空港で送るとかいうの。姫島の養殖場で作って。あれは村じゃからかな。

三浦 多分、姫島が一番最初に売り出して。

木村 で、この前行ったときは、伝染病が流行って、やられたって聞いた。

三浦 もう激減してしまっただけね。ウィルスかなんかが入ってて、だめになってしまっただけね。今、国見が養殖、少しはね。岐部の方が良くなったって聞きましたけど。後は、どうなんだろう。城下かれいとか有名だけど。

木村 大分は何でもあるから、こう、いろいろやって何でも生きていけるようなかんじじゃないんですかね。のんびりしちよる言うか。せっぱ詰まって言うこと無いかもしれんですね。

三浦 だから、これがちゅうのは別に、何でもありすぎて、却って無いですね。

丸山 海のは海のものであるし、山のは山のものであるし、何とか、ほんとお金使わなくても、何とか暮らして行けるような。

木村 なんか、のんびりしてるようなかんじしますよね。国東半島のところに上陸すると。

三浦 のんびりはしてないですね。

是松 最近の人間はギスギスしてきて、それを早く昔のように、あそこに来るとのんびりできるというか、『癒しの場所』にしたいんですけどね。

木村 僕は、千葉に20年くらい前おったんですよ。千葉ものんびりしてるんですよね。でも、東京近いじゃないですか。それで、ギスギスし始めたと言うか。でも、それでお互い交流すればまたね。

工藤 じゃあ、共通点っていうのは、やっぱり祝島も、いろいろ話聞いてると、癒しっていうことにおいては共通点がありますね。

是松 今そこが、みんな金に追われたり、時間に追われたりとか、なんでこう生活をね。

工藤 だから、私なんか帰って来ると、上関というか、柳井から帰って来ると、すごい景色きれいなんですよ。で、それを見てると、やっぱり癒されるんですよ、毎回。だから、「ああ、ここが見れるからほっとする」というか、自分のふるさとに帰る意味っていうのがあるから、そういうのを使わない手はないんじゃないかなっていうふうなのは毎回感じます。

三浦 すごくいいですね。後、釣り場はどうなんですか？魚を釣るとか。

國弘 それは結構来てますよ。

三浦 結構いいなとか思ったんですよ。

木村 どういうかたちで表すかっていう。僕は教員しよるじゃないですか。そしたら、怒る言うのは当然怒りますよね。怒ったとき、どういうかたちで子どもに接するか言うか。だから、今、いなかと言うのは貧しいじゃないですか。貧しいからと言って、どういうかたちでやって行くか言うのを僕は考えないけん思うんですよ。経済性言うか。だから、それを怒って直接、ストレートに子どもに言うたら、子どもはどう受け止めるか考えないままやったら、だめと思うんですよ。それはもうその子を潰す言うか。だから、それをどう自分なりに、まあ、僕らは上品にはできんけどね、でも、自分なりの上品さでどう接するか言うか、そこらへんをしっかりと考えて接する言うか、僕で終わってもいいとか、それでいいんだよね。でも、自分なりの美しさと言うか、美しくはないけどね、自分の美しさっていうのはひとりひとりが持ってると思いますから、それを、苦しくても、苦しい言うか、そんな苦しいもないけど、自分なりにこう。自分の好きなスポーツとかね。

丸山 だから、もう何でも、今、交流っていう面から言えば、今現時点で何が足りないかっていうと、みんな思いが違うっていうか、国東半島を近いって言う人もいれば、国東半島を遠いと言う人もある、いろんな感覚がばらばらなんですよ。要は、なぜばらばらなのかって言ったら、情報の共有性が全然ない。いや、祝島ってあるんだけど、『神舞』は分かるんだけど、じゃあ、「ほんとに祝島って知ってるの？」、「ほんとに国東半島って知ってるの？」って言ったら、そのへんの細かい情報、国東半島のイメージは分かるけど、「どんなふうに行ったらいいの？」、「何があるの？」、「どんなのがあるの？」、「祝島ってどんなのがあるの？」、「祝島何があるの？」っていう、その情報の共有性が全然、はっきり言ってない。個々には多分ありますよね。個人個人は、「いや、僕は行ったことあるよ。」とか言う人もいると思いますが、絶対数から言ったときに、そこでの接点が共有性がないって思うんですよ。だから、一番最初に取り掛からなくちゃいけないのは、その情報の共有性をどう持って行くか、みんなに「祝島はこんなんですよ。」「国東半島ってこんなんですよ。」って。で、ある程度分かったと、じゃあ、何とか「一度行って話してみようか」とか、「一度呼んでみよう」とか、

「一度どこか中間地点で会ってみよう」とか、「いや、会うよりも何よりも、陸回りで行くよりも、船で行った方がおもしろいんじゃないか」とか、そこらへんのこと生まれてこない限りはなかなかそこへんは難しいのかなと。お互いに癒しの場であり、『いなか』であり、逆に言うと『いなか』が今の世の中にとっては貴重だしまいたいところがあるじゃないですか。それをどうやっていくか。後、全体的には祝島も国東半島も一緒なんですよ。僕が個人的に思ってるのは、確かに自分が住みよい町であることプラス、何を望むかって言ったら、どうやったら人を集められるか？、誰を呼ぶか？、誰を集めるか？ってことですよね。後は、いやらしい話、人がどうやったらお金を落していくかを考えると、交流というものが大事になると思いますね。経済を主軸にしてものごとを考えると、例えば、10種類種目があって、その人にとっては10種類のうちひとつだけでも喜びを感じればいいわけですよ。10種類あったら、10種類喜びを感じる必要は別になくて、なんかひとつでも見つければいいわけで、そういったことの方が、大切なのかなと、むしろ、今の時点で言うと、初歩の段階なんだから、どれだけ情報をお互いに発信し合いこして、まあ、そのひとつとして、『のろし』もいいでしょうし、とりあえず、『神舞』のときにフェリーをたくさんチャーターして来てみるっていうのもおもしろいでしょうし、そんなことから始めるのかなという気はしますけどね。

三浦 そうですね。

丸山 じゃないと、ただ、単純に、竹田津港から周防灘フェリーに乗って、徳山から電車に乗って、柳井港から連絡船に乗って、「ああ遠いや」という話でしか終わらないんですよ。普通通りのパターンで行くとね。

國弘 遠いし、そこに行ったら何があるのって、やっぱりお互いに『いなか』ですから、行ったら同じようなものがあったりするんですよ。それだったら、わざわざ、お金かけて、時間かけてとはならないですよ。

木村 でも、トータルで考える言うのは大事だよ。だから、そういうのもあるし。

國弘 そういう意味では、僕らはインターネットとか今やっとするから、まずそういうのを作って、お互いに意見の交換とかができる場を実際にインターネット上で作って、そしたら、別に動く必要がないですよ。お金もあんまりかからないし。そういうの作ったらどうかなって思いますけどね。祝島のホームページに、『神舞』で大分の方から来るじゃないですか、そういう人は時々書き込んでくれたりとかしてるんですよ。メールももらうし。そういうところからだったらやりやすいのはやりやすいですよ。

三浦 僕は、姫島は『きつね踊り』とかで、あのとき行くと、島の人口の倍くらいまで人が増えてしまう、だから、そういうのがもしかしたら、何かの形で、倍にならなくてもいいから、やっぱりやれる可能性はあると思うんですよ。今、

100人くらい、それは、地域の人、関わってる人だけがそこに集まるんだと思うけど、そうじゃない、違う人たちも、もしやれば、そういうので少しずつ広がっていく、そういうような形でやって行けば、逆に言えば、ここに来る目的だけじゃなくって、いろんな形で経由しながら、ここに来ることもまた、ひとつの選択肢の中に入れていけるんじゃないかなって。

木村 だから、大分県言うのはそこへんが僕は立派じゃな思うよね。大分県でしょう。で、都会にはそういう人言うのは散らばってる思うんですよ。でも、大分県言うのは新聞に載ってるだけでしか知らんけど、そういう人が結構生まれてきてるんじゃないかなって言う気がしますよね。何か、県知事がこう、書いてるじゃないですか。そういうのがやっぱり影響してるんかなとか思いますよね、県外の者は。そういうのを育ててるんかなとか、一村一品とか。僕は、何かをやりたいて考えたとき、最初のスタートはひとりだろうと思うんですよ。で、祝島で何ができるかって、トライアスロンだってできるじゃないかとかね。思いながらやる人が2人でも増えればいいし、その1人が増えればいいから、それが、ほんとに現実に生活してる人にとってはやっぱり一番大事じゃないかな。それの方がおもしろくなるし、年取ったらもう終わるかもしれんけど、今やる間はやっぱり自分が向いた方向を一所懸命やったら、おもしろがりながら言うか、で、繋がらなければそれでしょうがないかなと。秀人君がこう、行ったりするということは、やっぱりやりたいな言う部分でもあるし、引っ掛かる部分でもあるし、そういうので繋がりがいけばいいんじゃないかな。それで、終わらせんように努力を何かね、努力言うか、何か考えながらいろいろやる言うか、こう、広がりかね。

國弘 終わったら終わってもいいんですよ。その時代、その時代で、何かできる人がやればいい話で、例えば『祝島ネット』でも、定年になったら帰って来る人っていうのはちょこちょこいるんですよ。だから、そういう人が後何年かしたら帰って来る予定なんだけどって、その人は、ゲートボールの先生みたいな人があって、で、帰ったらゲートボールの大会を祝島でやりたいとか言いよるんですよ。だから、その人が帰って来たらやればいいし、僕らはマラソンがとりあえず趣味でもあるし、やろうかなってなったんですけど、別にそれが僕らがおらんようになって、続いたら続いた方がいいんじゃないけど、別に続かなくても別のものが始まれば、またそれはそれでおもしろいと思うし。

木村 だから、帰る人でもいろいろ、全然そういう繋がりの無い人が帰っても来てるんですよ。でも、そういう繋がりが持てる言うのは、まあ、秀人君がインターネットで流してるホームページを見て、繋がりができてるんだから、それだけでも、繋がりができてるんですよ。どういう方向向いてるかとかね。それは、プラスだろうなって思いますよ。

工藤 やはり、今の時代っていうのは、我々もそうですけれども、インターネットがなければ帰って来なかったと思います。祝島にはね。例え、祝島の人間であったとしても、私も誘わなかっただろうし、というのは、インターネットを媒介にして、ここに居ても、都会と同じような生活ができるんだっていうふうな、情報が得られるんだってことで帰って来たんであって、だから、やっぱりこれも、そういうふうな情報網が無ければ、ここには私なんかは住まなかっただろうっていうふうに思います。だから、やっぱりそこを主軸に考えるっていうことは大事じゃないでしょうか。

國弘 僕もそうなんですよ。あのホームページを作りさえしなければ、まだ祝島に僕は帰ってないと思いますよ。あれを作ったおかげで帰って来たんだけど。

丸山 だから、ある意味で『いなか』っていうじゃないですか。『いなか』っていうけど、生活そのものは文化的でね。

國弘 別に、不便なことってあんまり無いんですよ。僕にとってはね。今は船も早くなったしね。だから、後は医療関係がね。年取って病気がちになると、ちょっと辛いところはあるかなっていう気はするんだけど、後はそんなにね、金もかからんし。

丸山 だから、いろいろな文化、元々の文化があって、自分たちの文化も活用して、新たなのをまた作ってというか。妙に昔にならえっていうのはね。祝島だけでも、食文化、石豆腐ってあるじゃないですか。そんなんがあったら、極端な話、じゃあ、国東半島と祝島とあれだけ繋がりがあるんだから、食文化競争で何ができるかと、お互いにいいものを作って、その代わり使うのは地元で採れたものしか使ったらいけないという、食文化競争会みたいなのをやって、で、徳山あたりでどっちの方が競争会でおいしいかってみんなに食べてもらって、で、赤旗白旗挙げさせて、どっちが勝ったとかね。結局、そんなつまらんことでもおもしろいと思うんですよ。そんな感じでやることの方がかえっておもしろいかなと。てなくて、『デザイン会議』だけに所属しているというようなかんじなんですけれども。

工藤 先ほど丸山さんが、経済を主軸にしたことを基礎に置いて考えるっていうのが私も大事だなと思います。それがなければ、先に繋がらないっていうかね。やっぱり儲けるっていうことはすごくおもしろいことなんですよね。だから、そのおもしろいっていう発想からやっぱりものごとをやっていかなければ、みんなが集まらないって思うんですよ。みんなが得するっていうかね、そういう発想が無ければ。やってもただ徒労に終わるんであれば、私一抜けた、二抜けたになると思うんです。だから、先ほどの話聞いてて、そういう発想って、これからは大事じゃないかなっていうふうには思いますね。

丸山 僕も特に思ったのは、徳島のいなかの方で、もみじの葉とか買えるっていうの

は、あれ1枚がいくらかになるんじゃないですか。いなかのおばあちゃんたちがちょっと裏に行けばある葉を集めてきて、京都かどっかの料亭に納めれば、年間何千億万になる商売をやってるじゃないですか。でも、結局、だけど、そのおばあちゃんたちが集めて来るときに、まあ、小遣い銭が増えるだけで喜びなんですよね。だから、やっぱり基本になってくるのはある部分、たくさん儲かる、大金持ちになる必要は無いんだけど、そこそこやったことが何かの形でフィードバックできることの方がもっとおもしろいというか、それが、金銭ってということじゃなくてもいいし、何か自分が喜びを感じたいという部分でも別に構わないと思うんだけど、そういう部分が何かないと、やっていく価値がないというか、何か終わったかという話じゃ、僕自身はおもしろくない。折角やるなら、何か経済的なものがあったり、何か得るところがないと、何もやったことが無為に等しいじゃおもしろくないなっていう気がするんですよ。

工藤 だから今、『とうがらし』あるじゃないですか。あれを縄みたいなのに挿して、ひとつのドライフラワーではないけれども、それを台所に飾れば、飾りにもなるし、料理にも使えるって、そういうような発想って大事ですよ。ただ飾るだけでなく、それが今度実用されるっていうかね。それがやっぱりこれからは大事じゃないですかね。

丸山 だから、そういうふうに作れば部屋のインテリアになるということになると、それだけで価値があるというか。

是松 あれは、虫除けになったり、いろいろするしね。

丸山 結構おもしろいと思うんですけど、祝島から出発して、国東半島から出発して、お互いにヨーイドンでどこで会うかとかね。結構おもしろいんじゃないですか。海に行くのもよし、丘回りで行くのもよし、真中へんっていうのはどのへんなのかっていうね、誰が一番遠くに行ってたとか、そんなばかばかしい話とかね。後、ヒッチハイクで行ったらどのへんまで行けたとかね。結構つまらんことの方が、そういう遊びの部分じゃないですか。で、結局、そういうことで、遊びの対象が祝島であったり国東半島であったりしてるだけの話で、そういう遊びの中でそういうこともあるし、広い意味で言えば、そういうことによって、祝島でもこれだけおもしろいことやってるんだったら1回行ってみようって話で来てくれれば儲けですよ。

三浦 それ、やっぱり一番ですよ。

丸山 だから、マラソンだってそうなんです。100人しか入れないって言うので当たってというこの価値観、これの方がすごく価値観があると思うんですよ。ホテルを作って、学校を使って、どこでもキャンプできて、1000人迎え入れるようになりましたって言って、仮に1000人来たときに、確かに走る人はおもしろいのかもしれないけど、走ることそのものはおもしろいのかもし

ないけど、参加することの価値観っていうのがぐっと下がったっていうか、何か僕自身はおもしろくない。むしろ、その貴重な100人に入りたいがための、ほんと、運ですよ。宝くじ当たる気分じゃないですか。10回連続出場とか、10枚Tシャツ持っているのは日本で、世界で俺ひとりみたいな価値観、そんなの方がかえっておもしろい。

木村 そこまでまだ行ってないよね。

國弘 四万十川が割合、それに近いんですよ。あそこは、1000人出れるんですよ。60km入れると1200人くらいになるんですけど、あそこも宿泊がそれしか泊まれないからって言って、1000人なんですけど、申込は3000人くらいいるんですよ。で、抽選なんです。だから、僕が7回連続で行けたっていうのは、結構奇跡に近いくらいなんです。

丸山 結局そういう思いがあるじゃないですか。参加する人個人からしてみれば、そういう思いになるじゃないですか。それと同じ気分なんです。

三浦 だからそこがね、やっぱり四万十川ってひとつの名前、ネームバリューですよ。1回行ってみたいっていうね。あそこは僕も行ったことがあるけど、そういうネームバリュー、だから、祝島のネームバリューをどのくらいにさせるかと、その価値観みたいな。

國弘 後、四万十川のマラソンで言うと、やっぱり地元の人への応援、ボランティアとかいうのがすごい走ってて、うれしいんですよ。人家が、やっぱり人口が少ないから、ぼつぼつしか、10何km走ってやっと次の人がおるとかいうかんじなんです。で、そういうところの人が、もうお年寄りから何から一生懸命応援してくれると、すごいうれしいから、それがすごい良くて、毎年行きたいなっていうかんじなんですけど。だからその時に、祝島だったら同じようにすごいうれしいような応援ができるんじゃないかなと思ったんですよ。その四万十川走りよったときにね。

丸山 結構、そういう意味では祝島って素材があるみたいですね。

三浦 僕もやり方で結構おもしろいと思いますよ。だから、同じことやっても多分同じになってしまうからね。

木村 だから、最初のことを考えつくのが大事だと思います。例えば『のろし』とか。だから、最初のことを考えるのは、しょっちゅう考えてないと出ないと思うんですよ。

三浦 だから、出発の合図を変えてみるとか、何かいろいろ方法があると思うんですよ。何かないと、同じレベルのやり方だったらいっぱいあるからね。どっかで自然淘汰されてしまう。

木村 二番煎じはだめじゃろうと思いますよね。あんまりね。

丸山 どれだけ人がしないことをするか。人がしないことをするっていうのは、人が

つまらなくてということが人がしないことだからね。これだったらだめだっていうことをすればいいですよ。

國弘 そっちの方がおもしろいですよね。どうなるのかなと思いついてやってみよう。

丸山 他人から見たらばかばかしいって思うことをやることの方がかえっておもしろい部分っていうのは結構世の中多いじゃないですか。今は、何かって言うと、合理主義ですから、これがこうなってこの次はこうなるからもうこれはだめだということの方が世の中多すぎる。大半がそうじゃないですか。これはこうしてこうなると失敗するんだから、絶対したらいけないよと。だけど、絶対したらいけないこの無駄なことが、かえって価値になる部分っていうのが逆の発想なんですけど、出てきたりするケースの方が今は多いですよ。そういうのが希少価値なのかなって思いますよ。ややもすると、今、コンピュータの世界だと、それこそすぐ計算しちゃって終わっちゃうから、もう結果は見えてると。じゃあ、おもしろくない。やっぱり人間気持ちがあるんだから、イチかバチかの部分があってもいいじゃないっていう気持ちはありますよね。

深田 それではどうも、ここで中締めを。本日は非常にご意見が出まして、私どもの予定していた内容の懇談会になったと思います。ありがとうございました。ただ、本来ワークショップっていうのは、2時間くらい、1回くらいで終わるものじゃなくて、町づくり、地域づくり、ハードな、例えばどういう港湾を作るんだとか、橋を作るんだとかというようなワークショップは、かなり2時間でも最低5回するとか、いろいろみなさんのお話し合いの中でかたち作って行くものなんですけれども、本日はどうしてもこういった国土交通省の事業という制約の中で、わずか2時間の中で、こういう話をしなければならぬということ、大変みなさまにはご迷惑をおかけ致しましたけれども、大変有意義な会議になったと思います。ありがとうございました。それで、この場でなかなか出尽くさなかったこととか、あるいは家に帰られて、よくよく今日の話を考えてみられると、こういうことも言えば良かったとか、そういうものがもしございましたら、お手元の方に原稿用紙をお配りしておりますので、それに記入していただいて、私どもの方に寄稿していただければ、今度のシンポジウム等に利用させていただきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願い致します。どうも、本日はありがとうございました。